

平成 21 年 5 月 23 日現在

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2008

課題番号：19730366

研究課題名（和文）若年者におけるエイジズムの測定と要因分析

研究課題名（英文）Measurement and Correlates of Ageism Among Japanese Young Men

研究代表者

原田 謙 (HARADA KEN)

実践女子大学・人間社会学部・専任講師

研究者番号：40405999

研究成果の概要：

本研究は、「日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版」を用いて、都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因を検討することを目的とした。分析の結果、加齢に関する知識が乏しい者ほどエイジズムが強く、加齢に関する正しい情報と教育によってエイジズムを弱めることができる可能性が示された。また、生活満足度が低い者ほどエイジズムが強く、日常生活における欲求不満がエイジズムに影響することが示された。年金・介護保険といった老後の生活保障に関する正確な情報提供も、エイジズムを解消するために必要な方策と考えられる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	0	600,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	150,000	1,250,000

研究分野：社会老年学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：高齢者、エイジズム、パーソナル・ネットワーク、加齢に関する知識、生活満足度

1. 研究開始当初の背景

近年、日本においても高齢者就労の議論や社会保障をめぐる高齢者と若年者の世代間対立の議論を通じて、エイジズム (ageism ; 高齢者差別) という言葉を目にする機会が増えてきた。Butler は、エイジズムの概念を「高齢であることを理由とする、人びとに対する系統的なステレオタイプ化と差別のプロセス」と定義している。このエイジズムは、ステレオタイプと神話、直接的な蔑視・嫌悪、

接触の回避、住宅・雇用・多様なサービスにおける差別的な行為など、個人的レベルおよび制度的レベルにおいて幅広い現象として現れている

日本においても、高齢者に対する認知成分に関する研究が、Semantic Differential (SD) 法による老人イメージの分析を中心に展開されてきた。また、Palmore の The Facts on Aging Quiz (FAQ) を用いた加齢に関する知識の分析が行われ、エイジングへの意識研究

などが蓄積されてきた。

このように日本においても、高齢者に対する認知成分に関する研究がすすめられてきたが、差別的な態度や高齢者との接触を回避するような感情成分を含めたエイジズムの測定およびその要因分析を目的とした実証研究は行われていない。そこで原田らは、日本においても FSA のようにエイジズムを定量化し標準的に利用可能な尺度が不可欠と考え、認知成分だけでなく感情成分をも含む「日本語版 Fraboni エイジズム尺度短縮版（以下、FSA 短縮版）」を作成した（原田謙ほか「日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成——都市部の若年男性におけるエイジズムの測定」『老年社会科学』26(3): 308-319, 2004)。

2. 研究の目的

本研究は、FSA 短縮版を用いて、都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因を検討することを目的とする。Palmore によるエイジズムの要因に関する議論、日本での老人イメージをはじめとする高齢者観に関する先行研究の知見をふまえて、本研究は、以下の3つの仮説を設定した。

第1の仮説は、親族・仕事仲間など日頃から親しくしている高齢者が少ない者、祖父母との同居経験がない者ほどエイジズムが強いという「ネットワーク」仮説である。本研究では、もっとも身近な高齢者である祖父母との同居経験と、日常生活における親族関係や仕事仲間といったネットワークが、エイジズムに与える影響を検討する。

第2の仮説は、加齢に関する事実を知らない者ほどエイジズムが強いという「知識」仮説である。Palmore は、エイジズムの個人的要因として「無知」を挙げ、加齢についての事実を知らない者ほど高齢者に対する否定的な態度が目立つ点を指摘している。

第3の仮説は、生活満足度が低い者、老後の生活に対する不安感が高い者の方がエイジズムが強いという「満足度・不安感」仮説である。Palmore は、高齢者に対する偏見は、欲求不満の強さに原因がある可能性を示唆している。また彼は、死への不安が強い者ほど高齢者に対する偏見が強い点を指摘している。本研究では、この不満・不安感といったエイジズムを支える心理的要因にも着目した。

3. 研究の方法

(1) データ

本研究のデータは、桜美林大学加齢・発達研究所が実施した「若年者の就労と高齢者に対する意識調査」から得た。

サンプルは、東京都の区市部および千葉県・神奈川県・埼玉県の市部に居住する 25～39 歳の男性 3,000 人が、層化2段無作為抽出法によって抽出された。国勢調査の基本単位区を第1次抽出単位とし、地域（東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県）と人口規模（政令市・23区、20万人以上の市、10～20万人の市、10万人未満の市）を考慮して層化された16の層から、150地点が抽出された。次に、各抽出地点から住民基本台帳（もしくは選挙人名簿）にもとづいて、対象者を平均20人ずつ系統抽出した。

本調査は、2003年1～2月初旬にかけて、郵送留め置き法（郵送配布・訪問回収の自記式）によって行われた。回収率を高めるために、対象者が不在の場合には、調査員が日をあらためて最低3回訪問した。回収率は、43.0%（完了数1,289人）であった。

(2) 変数

エイジズムは、FSA 短縮版(3因子14項目)を用いて測定した。本分析では、14項目の「合計得点」および「嫌悪・差別」「回避」「誹謗」からなる3つの下位尺度の得点を従属変数とした。調査票では、「65歳以上の高齢者についておききます」という導入文をつけて、各項目について「そう思う」「まあそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」という5つの選択肢から回答を得た。それぞれの選択肢に5点から1点を配点し単純加算して得点化した。「嫌悪・差別」は「高齢者には地域のスポーツ施設を使って欲しくない」「高齢者が私に話しかけてきても、私は話をしたくない」「高齢者に会うと、時々目を合わせないようにしてしまう」「高齢者は誰にも面倒をかけない場所に住むのが一番だ」「高齢者は、若い人の集まりによばれた時には感謝すべきだ」「ほとんどの高齢者には、赤ん坊の面倒を信頼して任すことができない」の6項目、「回避」は「個人的には、高齢者とは長い時間を過ごしたくない」「もし招待されても、自分は老人クラブの行事には行きたくない」「できれば高齢者と一緒に住みたくない」「高齢者とのつきあいは結構楽しい（逆転項目）」「ほとんどの高齢者は、同じ話を何度もするのでイライラさせられる」の5項目、「誹謗」は「多くの高齢者は、古くからの友人でかたまって、新しい友人をつくることに興味がない」「多くの高齢者は過去に生きている」「多くの高齢者はけちでお金や物を貯めている」の3項目を用いて測定した。

エイジズムの関連要因として取り上げる変数は、基本属性、ネットワーク、加齢に関する知識、生活満足度・老後不安感である。基本属性は、年齢、就学年数、従業上の地位を用いた。

4. 研究成果

(1) 分析結果

重回帰分析の結果、「合計得点」を従属変数にした場合、従業上の地位、60歳以上の親族数、加齢に関する知識、生活満足度が有意な影響をもっていた。具体的には、親しい高齢親族数が少ない者、知識スコアが低い者、生活満足度が低い者ほど、エイジズムが強い傾向が示された。

「嫌悪・差別」の得点を従属変数にした場合、従業上の地位、60歳以上の親族数、加齢に関する知識、生活満足度が有意な影響をもっていた。具体的には、親しい高齢親族数が少ない者、知識スコアが低い者、生活満足度が低い者ほど、高齢者に対する嫌悪・差別意識が強い傾向が示された。

「回避」を従属変数にした場合、従業上の地位、60歳以上の親族数、60歳以上の仕事仲間数、加齢に関する知識、生活満足度が有意な影響をもっていた。具体的には、親しい高齢親族数および仕事仲間数が少ない者、知識スコアが低い者、生活満足度が低い者ほど、高齢者との接触を回避する傾向が示された。

「誹謗」の得点を従属変数にした場合、加齢に関する知識、生活満足度、老後不安感が有意な影響をもっていた。具体的には、知識スコアが低い者、生活満足度が低い者、老後不安感が強い者ほど、否定的な固定観念が強い傾向が示された。

(2) 考察

第1に、「ネットワーク」仮説は、「合計得点」「嫌悪・差別」「回避」に対する60歳以上の親族数の影響および「回避」に対する60歳以上の仕事仲間数の影響が確認され、部分的に支持された。ただし、祖父母との同居経験の影響は確認されず、同居経験がある者はエイジズムが弱いという接触仮説 (contact hypothesis) は支持されなかった。このように、もっとも身近な高齢者である祖父母との同居経験の有無はエイジズムとの関連がみられず、子ども・青年期における祖父母・孫関係の質が、高齢者に対する態度を肯定的にも否定的にもする可能性が考えられる。また、Palmore は、加齢に関する知識と高齢者との接触はほとんど関連がみられず、接触する高齢者のタイプによって高齢者に対する態度は肯定的にも否定的にもなる点を指摘している。本研究においても、とくに別居親族の親密なネットワーク (intimate network) の影響が確認され、ネットワークのタイプによってエイジズムに対する影響が異なる点が示唆された。

第2に、「知識」仮説は支持された。本研究ではFAQを加齢に関する知識の指標として用いたが、そのスコアが低い者ほどエイジズ

ムが強かった。この知見を考慮すると、年をとるということが実際にどうということなのかという情報提供および教育を通じて、思いこみによる固定観念が弱まる可能性があることを示唆している。事実、FSAを用いたStuart-Hamiltonの介入研究は、「年齢意識に関するワークショップ」の実施が、高齢者に対する「誹謗」を弱めるという教育効果を示していた。つまり、学校・公共施設におけるエイジング教育のプログラム開発などによって、一般住民に高齢者の状況やエイジング・プロセスに関する情報を提供する「啓発的老年学 (advocacy gerontology)」の意義が認められる。

第3に、「不満・不安」仮説は、生活満足度の影響および「誹謗」に対する老後不安感の影響が確認された。本研究においても、Palmoreが指摘しているように、生活における欲求不満がエイジズムに影響することが示された。この欲求不満とエイジズムの関連は、雇用政策や年金・介護保険といった社会保障をめぐる「世代間対立」の問題につながる知見であろう。不安感の影響については、死の不安感と高齢者に対する否定的な態度との関連に関する研究が行われてきたが、その結果は一貫していない。本研究では、生活費不足や寝たきりといった老後不安感と「嫌悪・差別」というより強いエイジズムとの関連はみられなかった。しかし「誹謗」という認知成分が老後不安にもとづいている点が示唆された。つまり、先に考察した加齢に関する正しい知識の提供だけでなく、年金・介護保険といった老後の生活保障に関する正確な情報提供も、エイジズムを解消するために必要な方策である。

最後に、本研究の限界および今後の課題を述べておく。第1に、本研究で用いたデータは、都市部の若年男性を対象としていたため、就労にともなう一時不在・長期不在による調査不能者が増え、回収率が43.0%にとどまっていた。調査不能者が増えると、独立変数の分散が小さくなり、結果として仮説が支持されなくなる可能性が高まる。しかし、本分析の場合、仮説はほぼ支持されており、その影響はほとんどなかったと考える。今後は、都市部の若年男性だけでなく、女性や農村・地方都市住民のサンプルを含めた研究が求められる。本研究以外にもFSA短縮版を用いた調査が着手されつつあるが、SD法を用いた老人イメージに関する研究と同様に、児童、高校・大学生、中年とといった異なる世代ごとの調査を実施することにより、エイジズムの性差・年齢(世代)差を検討する必要がある。

第2に、重回帰分析の決定係数が小さかった点を考慮すると、エイジズムの個人的要因として、今回取り上げなかったパーソナリティ変数(権威主義的パーソナリティなど)が

考えられる。また、生活満足度の影響が支持された「不満・不安」仮説について、日常生活におけるどのような欲求不満（領域別生活満足度）がエイジズムに影響しているのか、そのメカニズムを詳細に検討していく必要がある。こうした実証研究の積み重ねにもとづいて、先に述べた「啓発的老年学」の展開が検討されるべきであろう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①原田謙、杉澤秀博、柴田博、都市部の若年男性におけるエイジズムに関連する要因、老年社会科学、29(4)、485-492、2008、査読あり

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田謙 (HARADA KEN)

実践女子大学・人間社会学部・専任講師

研究者番号：40405999

(2) 研究分担者

なし